

# 令和3年度小平市立小平第十三小学校～「全国学力・学習状況調査」結果概要～

## 1 調査目的・対象

児童・生徒の学力や学習状況を把握・分析し、成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、今後の児童・生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てるための調査です。

## 2 調査内容

### (1) 教科に関する調査

身に付けておこななければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等、また、知識・技能を実生活の様々な場面で活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関することを児童が答える調査です。

### (2) 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関することを児童が答える調査です。

## 3 各教科の調査結果の分析

### 【国語】

### 状況の分析

### 課題

国語科全体の正答率は、全国平均を5.3ポイント、東京都平均を2ポイント上回った。特に「思考力、判断力、表現力等」における「話すこと・聞くこと」では全国平均より12ポイント高く、「読むこと」では10ポイント高かった。

一方で「書くこと」の正答率は全国平均、東京都平均をともに下回る結果となった。また、問題形式別に見てみると、記述式問題の正答率が全国・東京都平均を大幅に下回った。

記述式の中でも、「自分の主張が明確に伝わるように、文章全体の構成や展開を考える」こと、「目的や意図に応じて、理由を明確にしながら自分の考えが伝わるような書き表し方を工夫する」ことが求められる問題の正答率が著しく低かった。自分の主張を支える理由や事例を、文中にどのように配置すれば効果的に相手に伝わるのか考える点において課題がみられる。

また、理由や事例を具体的に詳しく書くべきか、それとも簡単に書くべきかといった判断を目的や意図に応じて行う等、読み手が納得できる文章作りにおいても課題がみられた。

## 学校で取り組む具体的な改善策

- ・課題である書く力を身に付けるために、文章を書く際の材料を図に表して整理したり関連付けたりして、それぞれの段落に書く内容を精査しながら文章構成を検討する。自身の主張や理由、事例等をワークシートやカードに書き表し、それを実際に並べ替えながら文章を考え、どの並び順が自分の主張を効果的に伝えられるか考える。また、頭括型・双括型といった様々な文型に触れ、自分の主張を効果的に伝えるには、どの文型を生かせばよいか考える。
- ・自分の考えとその理由や、事例の関係性を確かめながら詳細に文章を書けるようにする。文章を考える中で事実と感想、意見とをはっきりと区別できるようにする。また、自身が取り上げた事例は客観的な事実裏付けられているか確認し、目的や意図に応じた適切な事例の提示ができるようにする。

## 【算数】

## 状況の分析

## 課題

算数科全体の平均正答率は、全国平均を4.8ポイント、東京都平均を1ポイント上回る結果となった。「数と計算」領域では、全国平均よりも8ポイント程度高い正答率を示した。また、問題形式では、「記述式」問題の正答率が、全国平均より10ポイント高かった。

一方で「図形」、「変化と関係」領域では東京都平均を下回り、評価観点別では「知識・技能」の値は東京都平均より低い正答率であった。

「図形」領域の問題では、三角形の面積を求める問題の正答率が著しく低かった。示された辺の長さすべてを使って立式してしまう等、公式の理解はもとより、必要な情報を選び出すことにおいて課題がみられる。「変化と関係」領域では特に「速さを求める除法の式と商の意味を理解しているか」という問題での正答率が低かった。除法の商に対して、数量の大小と速さの関係を適切に捉えることに課題がみられる。

## 学校で取り組む具体的な改善策

- ・習熟度別指導をとおして、児童の実態を把握しながら個に応じたきめ細かい指導を継続する。
- ・朝学習やチャレンジ教室では、東京ベーシックドリルを活用する。特に毎週金曜日は東京ベーシックドリルに取り組む時間を学校全体で設ける。その際、診断テストの結果を踏まえて適宜学習内容を精選し、基礎・基本の習熟の徹底を図る。
- ・求積問題に対して図形の公式を活用する学習では、公式にあてはめるために必要な数値を正しく捉えることができるよう、「底辺と高さは垂直である」という関係性を、三角定規などを使って繰り返し指導する。また、すべての辺の長さが示されているような情報過多の問題から必要な情報を適切に選びだせるように、習熟度に応じた発展的な内容にも積極的に取り組む。
- ・時間や速さを求める問題では、題意を的確に捉え、どの単位を用いて解答するのか把握できるようにする。また、速さを比べる場面においては、速さを比べるためにはどの単位にそろえると分かりやすい数値になるか等、教師との対話の中で数量感覚の向上を図っていく。

- ① 「人が困っているときは、すすんで助けていますか。」という質問に対し、ほとんどの児童が肯定的な回答を示した。
- ② 「学校に行くのは楽しいと思いますか。」という質問に対し、9割以上の児童が肯定的な回答をした。特に「当てはまる」と回答した児童は全国平均より16ポイント上回った。
- ③ 「学校の授業時間以外に、普段1日当たりどのくらいの時間勉強をしますか。」という質問に対し、3時間以上と答えた児童は東京都平均よりも9ポイント低かった。最も高かったのは、「30分以上1時間未満」であった。
- ④ 「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間勉強をしますか。」という質問に対し、4時間以上と答えた児童は、東京都平均より8ポイント低かった。最も高かったのは「1時間以上2時間未満」であった。

③の「平日の家庭学習時間」の設問に対して、本校では家庭学習時間の目安として「10分×学年」（3学年までは30分）という目標を掲げている。6学年は、平日最低でも60分の家庭学習を行うことを目標としているため、児童の現状を考えると、平日の学習時間が短いことが基礎基本の定着につながらない要因の一つと考えられる。

④の「休日の学習時間」の設問に対しては、平日以上に学習の時間を確保することが望まれる。しかし、休日の学習時間が「1時間以上、2時間より少ない」と回答した児童の割合が東京都平均より7ポイント以上も高い。2時間以上学習している児童の割合は、東京都平均より3ポイント低く、休日の学習時間が短い児童の底上げが、今後の課題と考える。

#### 学校で取り組む具体的な改善策

- ・朝学習やチャレンジ教室の時間を活用し、家庭学習で補いきれない学習の基礎・基本の定着を図っていく。また「生活しらべ」等のアンケートで得た家庭での学習状況を、学年だよりや学級だより、個人面談等をとおして保護者に伝え、児童の課題についての共通意識をもてるようにする。
- ・ワークテストのやり直し状況を保護者に確認してもらい、單元ごとの学習内容の定着度を把握できるようにし、児童の学習内容の理解の把握と家庭での学習時間の確保ができるように協力を仰いでいく。
- ・家庭での学習時間が短い児童へは、宿題以外に、自主学習ノート等への取組を実践していく。主体的な学習をとおして学習習慣を身に付け、家庭での学習時間の増加につなげていく。